

小学校教員時代の関衛 (せき・まもる, 1889-1939) 像

向野 康江*

(1997年4月30日受理)

The Biography of Mamoru Seki (1889-1939) in his Elementary School Teacher Days

Yasue KOHNO

キー・ワード：関衛，長崎，芸術教育，雑誌『小学校』，北村久雄

芸術教育研究にその生涯を捧げた関衛について、彼の投稿論文と著書、遺族の記憶を手がかりに、小学校教員時代の関衛像を追究した。たとえば、娘・小柳美保の筆者宛ての手紙には、教師として、父親としての関衛像が書き綴られている。雑誌『小学校』主幹・岸田牧堂の時評と関衛の時評は、同文館とのかかわりを示すものであり、関の夏季講習会演説は、彼の芸術教育評論が大変評判の高かったことを示している。北村久雄による関への公開質問状では、北村はその論を、他者のそれとは「別趣」なものとして批評し、教科教育論を超えた関の理想の高さを示唆している。また、この時期の雑誌記事や論文から、関の私生活が垣間見られる。

はじめに

大正期の「教育の普及化」が生みだした芸術教育思想家・関衛の業績については、『茨城大学教育学部紀要』第46号所収の「関衛(1889-1939)の研究業績一覧¹⁾」で紹介した。略歴については、関衛に関する一連の発表論文において触れてきた²⁾。本論では、「博士論文概要：関衛研究—関衛(せき・まもる, 1889-1939)と大正期芸術教育思想の展開—」で述べている研究方法、すなわち(1)大正期芸術教育思想の総合的理解(2)思想の内的・主体的把握(3)伝記学を超えた伝記の再認識³⁾にのっとり、小学校教員時代の関衛像を追究した。

* 茨城大学教育学部 (Faculty of Education, Ibaraki University, Mito, Japan)

長崎師範学校から小学校教員へ

関衛（せき・まもる）は、明治22年（1889）11月3日に、長崎県南高来郡小濱（小浜）町甲（富津）で、関彦治⁴⁾とその妻・タダシ⁵⁾の三男として生まれた。明治32年（1899）3月に富津尋常小学校（現・富津小学校）を卒業後、小浜高等小学校（現・小浜小学校）を卒業した。そして、明治38年（1905）1月7日、15歳のとき、父の実家、南高来郡北有馬村の飛永源悟とその妻・ツルの養子となった。

その後、長崎師範学校（現・長崎大学教育学部）に進学して、明治45年（1912）3月に、本科第1部4回生として卒業した。その事実を、明治45年（1912）3月25日の長崎新聞の2面、および『長崎県教育雑誌』第235号（明治45年4月25日）の「彙報◎師範学校生配当」からも確認でき、また、大正9年（1920）12月15日に発行された『長崎県師範学校』によっても同じく確認できる。

飛永衛が長崎師範学校に在籍中は、桜馬場に校舎があり、本科1部は4年制であった⁶⁾。本科1部の場合は、高等小学校を卒業して直接、師範学校に進学する。ならば、衛は、小浜高等小学校を卒業後、長崎師範学校に入学までの期間に、4、5年を経ていることになる。その期間のことは、いまだ詳細でない。もともと美術学校に進学したかったらしい。しかし、養家からの学資だったので遠慮もあって断念した。師範学校に在学中は、教生として対馬に赴いたこともあった。

衛も他の兄弟と同じように大学へ進学したかったのであろう。特に東京美術学校へ進みたかったことは、衛の口ぐせになっていた。しかし養家・飛永家ではそれを許さなかったようである。飛永家としては、往々は実娘と結婚し、あくまでも長崎に住み、家を守ってもらわねばならなかったと考えられるからである。しかし、衛はどうしても飛永の実娘と結婚する気にはなれなかったらしい。またそのころには、飛永家でも男の子が生まれたということである。

関衛が教師になってすぐ、飛永家との間で悶着が生じたことは、『長崎県教育雑誌』第247号（大正2年4月25日）所収の「叙任辞令」の次の記事で推測できる。

●懲戒

南高来郡湯江尋常高等小学校訓導 関 衛

大正元年九月二十六日付ヲ以テ三週間ノ転地療養ノ許可ヲ受け其後該期限経過ニ際シ屢々注意ヲレタル(ママ)ニ不拘相当手續ヲ為サズ全年十一月二十四日小学校令第四十八条ニヨリ三ヶ月間月俸十分ノ一ヲ減ズ

大正元年十二月二十五日 知 事

大正3年（1914）11月3日に飛永家との離縁届が役所に提出されているので、懲戒処分を受けた大正元年（1912）12月の段階では、「飛永衛」であるにもかかわらず、すでに「関衛」と名乗っていることがわかる。

卒業後は、南高来郡を中心に、湯江、愛野、山田などの島原半島の小学校の教員をしていた。師範学校の卒業直後、南高来郡湯江村立湯江尋常高等小学校（現・南高来町立湯江小学校）に配属になったことは、前述の『長崎県教育雑誌』と長崎新聞によって明らかである。湯江小学校は、明治6年（1873）に設立された。明治5年（1872）の学制頒布の直後であるから、長崎県においても数少ない古い歴史をもつ小学校である。湯江小学校の歴史については『高来町郷土誌』（高来町、1987年）が詳しい。当時としては近代的な学校であったと想像される。南高来郡山田村立山田尋常高等

小学校の当時の状況については、『大正七年 南高来郡山田村郷土誌』（長崎県立図書館所蔵）が詳しい。

大正3年（1914）11月3日、25歳の誕生日の日に飛永家との離縁届を役所に提出し関家へもどって、小浜町甲（富津）3048番地の本家と同じ敷地内に分家した。11月4日に同僚の白石チトシとの婚姻届が提出されている。遺児・小柳美保の記憶にのこる衛とチトシの夫婦像は、常に学校の話しばかりしていて、相互が仕事のパートナーであったという。よきパートナーを得て、関衛の上昇志向は益々たかくなっていったと考えられる。

白石チトシは、明治25年（1892）7月25日、南高来郡加津佐村1439戸主、白石和太蔵の娘・白石スミの娘として誕生した。チトシは、『長崎県教育雑誌』第242号（大正1年11月25日）所収の「叙任辞令」（同雑誌、46頁）によれば、大正元年（1912）9月11日をもって、口ノ津第一尋常小学校から衛が勤務していた湯江尋常高等小学校に転任になっている。そして『長崎県教育雑誌』第266号（大正3年11月）所収の「叙任辞令●改姓名」（同雑誌、48頁）に、大正3年（1914）11月10日づけで、湯江尋常高訓（訓導）白石チトシが「関ト」改姓したことを告げられている。

その後二人は、南高来郡内の小学校を頻繁に転任する。『長崎県教育雑誌』第288号（大正6年8月25日）所収の「叙任辞令」（同雑誌、57頁）によると、関チトシが、大正6年（1917）8月26日づけで多比良尋常高等小学校から土黒尋常高等小学校に転任になっている。また、『長崎県教育雑誌』第319号（大正8年4月25日）所収の「叙任辞令」（同雑誌、32頁）によれば、関衛が愛野尋常高等小学校から富津尋常小学校へ、妻・チトシが山田尋常高等小学校から小浜尋常高等小学校へ転任になっている。大正9年（1920）11月25日の時点では、『長崎県教育雑誌』第338号（大正9年11月25日）所収の「職員録号」（同雑誌、23頁）に、関衛が富津尋常小学校、妻・チトシが小浜尋常高等小学校に勤務している記録がのこっている。同じく『長崎県教育雑誌』第349号（大正10年10月25日）所収の「職員録号 大正一〇年七月一日現在」（同雑誌、25頁）に、関衛が富津尋常小学校、妻・チトシが小浜尋常高等小学校に勤務している記録が残存している。このときの関衛の俸給が65円、妻・チトシの俸給が50円であった。これに対して、時期同じころ、衛と同年代で長崎女子師範学校で図画科の教諭をしていた東京美術学校卒の岡登貞治の俸給は、122円であった。

母校の富津尋常小学校に勤務した大正8年（1919）から大正10年（1921）のことを、当時の教息子・田中春男は、次のように話している。

小学校の教師としてはもったいない人材で、絵もうまかった。よく生徒の顔を黒板に描いたりして面白い先生だった。生徒達が何か悪いことをすると、教室の片隅に集めて、自分がグイグイ押ししたり、自分を背負わせて運動場を一周させた。また、親しみを込めて、生徒の名が「春男」ならば「ハル」、「保蔵」ならば「ヤス」、「紋作」ならば「モンジュウ」とよんだ。富津では今でも私らが名をよばれるときにはこの名が使われすっかり定着している。教授科目は小学校なので全教科を教えていた。羽織り、袴、下駄姿の滑稽な感じのする先生だったという⁷⁾。『高来町郷土誌』（前掲）の626頁には、当時の職員達の姿が写真にのこっている。

娘・小柳美保が、平成2年（1990）9月25日に筆者に宛てて書き送った手紙には、教師としての関衛と父親としての関衛が描かれている。

〈一〉

富津小学校に「おいで」といふ名前の生徒がいて学校を休んでばかりいたそうです。或る日

ひょっこり登校した、おいでさんに向かって 父は 名は「おいで」ばってんちっともお出でてこんのーと言ってみんなを笑わせたそうです。

《二》

父はたのまれて村の赤ちゃんの名付け親になりました。

《三》

戦前は11月頃「新なめ祭」といって祝日がありました。朝食の時 私に向かって今日はどうゆう日か知ってるかと言ひ私がいけませんと答えると 父はまじめな顔できょうは「兄さんの顔をなめる日」だと申しました。私はいやいやながら兄の顔をなめて大笑いになりました。

《四》

私が五、六才の頃 家では買食いは許してもらえませんでした。どうしてもお友達と同じように買い食いがしたくて 或日お金を一銭盗んであめ玉を二つ買い 一つは口に入れ 一つは手に持っていました、そのお金は村の娘さんがトーフを買ったお釣りを水くみしてる間家の石垣の上に置き忘れたもので 後で大きわぎになり父は私を柱にしばりつけ私の口の中に指を入れ 取り出すと庭に叩きつけ かわりに口の中にとうがらしを入れました。私はうそをつくことと盗みのおそろしさを思い知らされました。

《五》

その当時 富津の村祭りは 三日間村の広場に店が出ました。年に一度の楽しみで 父は私に小使いを一五銭呉ました。一日に五銭づつ使うようにとの事でしたが 私は一日で使ってしまった。それは瓢箪の形をしたガラスのびんに赤いシロップの入っているものでした。父は笑っていましたが 私はよほど買い食いが好きだったようです。

《六》

父はチャップリンが好きでした。或る日村に活動写真が来て 家族全部で見物に行きました。その時は母もいましたので大正八年頃かと思います。それはチャップリンの帽子が風に飛ばされて 動物園の象の頭の上に落ちて困っている写真でした。

《七》

私が小さい頃は 父はやさしく 寒い夜は私の足を自分のモモに挟んであたためてくれました。天井でネズミがあばれると あれはお父さんネズミ ああ音はお母さんかなああと子供ネズミだろうねと語ってくれました。多分母の亡き後だと思います。ひげの濃い父にホホズリされると痛くて泣きました。私が小学校入学の時もう母は亡く 父は私の顔をお湯でふいてくれかみも結ってくれました。私は 父に結ってもらったかみはかっこうが悪いので嫌いでした。

《八》

祖母が或る日 姉様人形を作って 顔はお父さんに描いてもらいなさいとの事でした。父の勉強部屋は 漬物小屋の上でした。どんな意味なのか今でもわかりませんが「チンと言っていました。小屋の二階でもちゃんとした部屋で 床の間に違い棚つきでした。そこはみんなの勉強用に作ってありました。壁には万里の長城の写真がはってあり 床の間には 私の肖像画が掛けてありました。父はいつも海の方に向かって勉強をしていました。その頃は母の死後で 自分も「かけ」にかかり 勤めを休んでいたようです。人形を差し出すと 父は泣

いた顔にしようかと言いました。私は笑った顔を描いてもらいました。

《九》

父は時々出かけました。帰りには必ずお土産がありました。昔はめずらしい板チョコとか動物の形をしたビスケット 私の着物なども買って来ました。或る時はとても美味しくてめずらしいお菓子を買って来て 私は これこそ日本一のお菓子だろうと思いました。この年までそのお菓子がどこの名物かわからずにおりましたが 最近嫁が京都のお土産とって忘れもしない思い出のお菓子と全く同じ品を買って来ました。京都の長久堂の「きぬた」といふ銘菓でした。その頃父はやはり京都に行っていたのですね。大正十一～二年頃と思います。

《十》

私は小学校の時 運動会ではいつもビリばかりでした。父はミホは口を大きくあけて走るので口の中に風が入っておそいのではないかと言って笑いました。又鼻が低いのは夜ねてから床の中で鼻をつまんでばかりいると高くなるよとも言いました。

《十一》

富津小学校に渡辺源八先生と言って とてもよい先生がおられ 或る時 上方見物に出かけその時の失敗談を父はおもしろおかしくみんなに語って聞かせ お腹が痛くなる程みんな大笑いしました。何十年後になっても親せきの人達に語り継がれ 父は「とんち」がよいのか話しをしながら 人を笑はせるため 多分作り話しもしたと思います。漫才師などの才能もあったかと思えます。

《一二》

私が大人になってからの父は 躰けに厳しく 切手をなめてはると注意され 手紙の封はハサミで切らないとおこられ足袋を立てはいては叱られ 口紅が濃いと注意されました。子供の頃 東京の父に便りを出しますとよく返送されました。「字も文章も大分上手になったが ところどころに字のあやまりがあるから注意されたし」等と赤字でしるしがしてありました。父はいつも何か考えてばかりいるようでした。道を歩きながらもいつも首をかしげたりしていました。昼になるとだまってソバやに のれんをくぐって入って行きました。私はのれんをくぐるのが何故か嫌いでハイカラなレストランに連れて行ってくればよいのにと 思っても 当時は 父親は絶対的で自分の意見は通りませんでした。もっとも結婚だけは別でしたが・・・。当時としては新しい考えの人でした。(抜粋, 原文のまま, 縦書き)

その後、千々石、大三東にも赴いた。しかし、妻・チトシが、大正11年(1922)10月8日午前1時20分、南高来郡小浜村丙六25番地(現・南高来郡小浜町大字北本町字上裏塚六25番地)の小さな離れ家で死亡した。原因はチフスであった。チフスにかかった妻・チトシが、養生していたその小さな離れ家は、現在もそのままのこっている。そこへ衛は幾度も看護にかよったという。チトシとのあいだには秀穂、ミホ(美保)、徹、明子をもうけた⁸⁾。ミホはその後、小柳実と結婚して小柳美保となった。

前述の、娘・小柳美保の平成2年(1990)9月25日の手紙の、《七》《八》(前掲)という文面からは、妻・チトシを亡くした寂しそうな衛のようすがうかがえる。その後の『長崎県教育雑誌』第370号(大正12年7月25日)所収の「職員録号 大正一二年七月一日現在」には、二人の名は見あたらない。おそらく、娘・小柳美保の平成2年(1990)9月25日の手紙に「その頃は母の死後で自

分（衛）も『かけ』にかかり、勤めを休んでいたようです」と書かれているように、衛自身も休職、あるいは退職していたと考えられる。ただし、大正11年（1922）4月2日東洋日の出新聞の2面では、富津尋常小学校に勤務している事実を確認できる。また戸籍によれば、大正12年（1923）12月15日に富津3048番地から、南高来郡千々石村戊230番地の現・高田表具店に転籍していた。

小学校教員時代の投稿論文と著書

関衛が長崎県南高来郡で小学校の教員をしていた間を含め、活水女子専門学校の中等教員になる前までに執筆したものは、「関衛（1889-1939）の研究業績一覧」（前出）の「表3. 関衛年代順執筆一覧表」のうち大正4年（1915）4月25日発行の『長崎県教育雑誌』第271号所収「図画教育短篇」より、大正12年（1923）6月1日発行の雑誌『小学校』第35巻第5号所収「生活を教育にまでをよむ」、『芸術教育の理論及実際』（東京同文館）までのものである。

1. 教育雑誌と小学校教師・関衛の活躍

『長崎県教育雑誌』については、すでに、「大正期の長崎における美術教育運動と関衛による科学普及書の執筆⁹¹⁾」において述べた。次の論文投稿先である雑誌『教育実験界』について述べる。当該雑誌の発刊の意図は、学と術の調和的統一を志向するものであった。社説に相当する「主張」は、渡辺英一（隈川）が第36巻第3号（大正4年8月1日）まで担当し、第36巻第4号（大正4年9月1日）から石川天崖が、第37巻第6号（大正5年7月1日）からは八大教育主張で創造教育を主張した稲毛詛風が担当する。稲毛が主筆となってから、発刊の目的から外れだし、理論研究の方に重点がかかってくる傾向を示す。そして、『教育実験界』は大正8年（1919）6月1日から『創造』になり、創造教育を中心とした教育の理論的研究へと変化し、稲毛色の強いものとなっている。このように教授法中心であった雑誌が理論研究へと変化していく、しかもその時期が大正中期である¹⁰⁾。

関衛は、第38巻第4号（大正6年4月1日）、第38巻第5号（大正6年5月1日）ならびに第38巻第7号（大正6年7月1日）に「児童の絵画と図画教育及教授（一）」、「同（二）」、「同（三）」を投稿している。そして、「児童画の心理及び教育」（『長崎県教育雑誌』第292号所収、大正6年1月25日）において、「古今幾多の教育説は、其の出立点や考へを異にするも拘らず、一として創造を説かぬものはない。然も創造性は人間の本能であるとは、現今の心理学学者の認めて居る所である（中略）創造教育に最も関係深き図画教授に於て、此方面を閉却すべからざるは明瞭である¹¹⁾」と述べていることから、関自身も「創造教育」という問題をかなり意識していることがわかる。すでに稲毛詛風が主筆を担当しており、理論研究の方に重点がかかる傾向をおびはじめていた時期である。しかし元来、発刊の意図は、学と術の調和的統一を志向するものであったため、内容的に教授法が中心であった雑誌である。関衛の投稿論文の内容は図画教育の教授方法であり、元来の主旨にそったものであるといえる。

自然科学論文「太陽輻射と高層気流との関係（上）」（『教育画報』第13巻第5号所収、大正11

年1月1日)と「同(下)」(同雑誌第13巻第6号所収、大正11年2月1日)の投稿先である『教育画報』は、第1巻第1号(大正4年9月1日)から第20巻第6号(大正14年12月1日)まで同文館より刊行された。本誌は、「教材研究の資料」または「一般家庭の読物」として創刊された月刊雑誌で、各教科の教材について各専門家が解説を加えているほかに、精緻な写真と鮮麗な挿絵が各頁にそえられているのが大きな特色である。この投稿行為は、「教材研究の資料」の主旨にそったものである¹²⁾。しかし、投稿雑誌の中でもっとも多いのが、雑誌『小学校』¹³⁾であることはいうまでもない。

2 雑誌『小学校』主幹・岸田牧堂の時評と関衛の時評

この雑誌『小学校』第23巻第6号(大正6年6月15日)の1頁には、「小学図画教授の根本的革新を希ふ」という論説が記載されている。その中の

小学校に於ける図画の現状は、彼の教授要旨から割出されて、徒に技能の末に走つてゐる為、児童とは甚だ隔離している手本を与へてそれを模写することを強ひてをる、模範を示してそれに依つて画かしめることも必要であらうけれども、児童の精神界に根底を置いてそれを選ばなくてはならぬ、徒に大人の趣味大人の思想を以て児童に強要することは、自然に発達し来りつゝあるところを損傷こそすれ、それを助長する所以ではないのである。この点から考へるとき、現在用いられている図画教科書は、児童とは甚しく隔絶してゐるものであり、彼等の発表能力を養成するものとしては極めて不適切なものである。(牧童)(抜粋)

という部分は、関衛の『普通教育に於ける芸術的陶冶』650頁の

然るに小学校に於ける図画教育の現状は 此教則から割出されて徒らなる技能の末に走りし為め 児童生活と甚だ隔離して居る手本を与へてそれを模写することを強ひて居る。図画教授上模範を示して夫によつて描かしめることも必要ではあるが 児童の精神界に根底を置いてそれを選ばなくてはならぬ。徒らに大人の趣味 大人の思想を以て児童に強要することは自然に発達し来たりつゝある処を妨げはしても 是を助長する所以ではないのである。斯かる点から考ふるとき現在小学校に用いられて居る図画教科書は児童と甚だしく隔絶して居るものであり 彼等の発表能力を養成するものとしては極めて不適切である。

と、細かな語句は異なっているが、全面的には同一であるとみなしてよい。「小学図画教授の根本的革新を希ふ」を書いた「牧童」とは、主幹・岸田牧堂¹⁴⁾のことである。関の著書『普通教育に於ける芸術的陶冶』は同文館からの発行であり、雑誌『小学校』も同文館からの発行である。『普通教育に於ける芸術的陶冶』の自序には、「編中には最近三四箇年間に於て同文館雑誌『小学校』其他二三の教育雑誌に発表したる論文を訂正して充当したるものも少なくはない」と書かれているから、同文館からの発行は当然といつてもさしつかえない。また、同書の序文において、「出版に際して種々なる配慮を忝うしたる岸田蒔夫氏に対して感謝の意を表する次第である」という感謝の言葉を記している。岸田蒔夫とは岸田牧堂のことである。そして、関が科学論文を発表した『教育実験界』『教育画報』のどちらも同文館からの発行である。このことは、関と同文館との関係が深いものであったことを示している。

3 関衛の夏季講習会演説と北村久雄による公開質問状

雑誌『小学校』の編集にあたっていた教育学会は、毎年、夏季講習会と冬季講習会を開催していた。科目と講師は読者の希望によって決定した。講演内容は、『小学校夏季増刊 最近思潮夏季講習録』号および『小学校冬季増刊 最近思潮冬季講習録』号にまとめられて、講習会に参加できなかった人々のために発売された。そして、大正10年（1921）7月15日発行の雑誌『小学校』第31巻第8号、すなわち、大正10年度の『小学校夏季増刊 最近思潮夏季講習録』号には関衛の「現代芸術の教育的批判」が、1頁から63頁にわたって掲載されている。このことは、関の芸術教育評論が大変評判の高かったことを示している。大正12年（1923）5月1日発行の雑誌『小学校』第35巻第3号所収の「内観主義図画教育の提唱」において、冒頭に「吾人が曾つて『普通教育に於ける芸術的陶冶』を著し、図画教授に於て特に精神生理過程を高踏してから、どうやら図画教授の思潮も変わって来たようである¹⁵⁾」と述べているのは、その評判の高かったことを裏づけている。また、大正13年（1924）7月10日に発行された『芸術教育大観』には、その自序の中で、講演をおこなっていたことが記されている。そして、本文にも「現代芸術の教育的批判」が収録されている。これはやはり、雑誌『小学校』の教育学会が主催する夏季講習会の講師をつとめ、講演していた事実を裏づけるものである。

以上より、小学校教師の関衛の活躍した場が、雑誌『小学校』の誌面であったことは明白である。しかし、活水女子専門学校の教員になってからは、『小学校』への投稿が止んでいる。特筆すべきは、雑誌『小学校』第33巻第4号（大正11年5月15日）の37-40頁に、北村久雄による「『芸術的陶冶』を讀みて」が、掲載されていることである。

『普通教育に於ける芸術的陶冶』（東京同文館、大正10年9月25日）は、「上編 芸術教育に関する一般的考察」と「中編 芸術教育論の予件としての児童研究」および「下編 普通教育に於ける芸術教育について」の3部で構成されている。序文は小西重直が書いている。上編では「第一章 芸術教育の諸意義について」「第二章 芸術教育思想史の進化」「第三章 芸術教育の問題の特色に就いて」「第四章 現代芸術の潮流に就いて」「第五章 現代芸術の教育的関係」について述べられている。ここでの芸術の範囲は、文芸・美術を含む芸術一般である。中編の「第六章 芸術教育に関する特殊官能の研究」「第七章 児童の精神発達に就いて」「第八章 児童の美的判断と描画能力の研究」では、児童の知能・感覚の発達段階を考察し、児童心理を研究している。そして、実験データが視覚を中心としているため、芸術の範囲は児童画、造形芸術である。特に第八章では、それが明確に打ち出されている。下編は、「第九章 芸術教育上の根本問題」「第十章 普通教育に於ける図画教授に就いて」「第十一章 小学校に於ける描画能力の開発指導に就いて」「第十二章 余論-残されたる問題及付録」で構成され、ここでは芸術の範囲を第十章、第十一章で図画・描画に限定している。まさに「現代（大正当時）の文芸と造形芸術とを背景とし、進んで普通教育に於ける美的享樂及美的創作の教育に是等を応用することを研究した」大著で、論としての完成度が高い。中でも、中編における児童研究の方法には関独自のものもあり、関が成し得た研究の中でもっとも功績の大なる部分である。

以上の内容に対して北村久雄が提示した論評は、内容に対する賞賛部分、同意部分、弱点の指摘部分ならびに質問部分とに分かれる。ここで問題とするのは、賞賛よりはむしろ弱点の指摘である。

まず、北村は最大の賞賛部分として、はじめと終わりにこの書の一読をすすめている。そして、児童教育中、図画教育上、実際に遭遇する難問に対して、本書は極めて切実に、回答を与えていること、積極的に読者の全人格を衝き動かすような、鋭い暗示を与えていることを賞賛している。

北村の、関の考えに対する同意部分の内容を、以下、①～⑦に本論執筆者が抜粋してわかりやすくまとめた。

①「芸術の評価は、その中に醸される道義的な健全な社会性の如何にある」という主唱は教育者の深慮を要する点であると感じた。

②現代の文芸、演劇、造形美術のもっとも危険な影響は、羞恥心を生命なきものとしてとり除こうとする傾向である。これは人間本質の根本的組織を動揺させるものであると説いている。これは傾聴しなければならない問題である。

③芸術がその技巧を拡大していくことは、道徳的感情の成長に欠くべからざる自然的根帯を失うものであるという考察は、面白く感じた。

④芸術の悪感化に対して青年を養護していくのは、権威的組織的禁止ではなく、青年の精神に内側からおよぼす積極的影響であるという。それには「心情教育と性格教育」とによらねばならないと説いている。その点は同感にたえない。

⑤著者（関）は、心情教育の可能・適切である時期や心情教育によって植えつけられた美的感情が人格力となること、心情教育と性格教育との心理関係について、注意深い考察を示している。留意すべき芸術的教育の根本問題である。

⑥児童を指導する場合、矛盾を児童らの作業上に要求していたと思われる心理的事実は、モイマンの説によって証明し、児童に写実の正確さを強要することは、児童の図画に対する興味を滅殺し、描画能力を萎縮させるといっている。これらは、児童の学習心理に関する根底的な省察もなく、ただ外表的な業績のみをおさめようとしている従来の多くの図画教授に対する有り難いヒントの一つになる。

⑦描画能力の研究においては、実に幾多の児童に対する実験を示している。この研究による児童の空間的表現能力と表象活動との関係などは、著者（関）のいう通り、図画教授上もっとも注意すべき警告を与えている。

弱点の指摘部分の内容は、以下、①～③に同様の手法でまとめた。

①美的感情の緊要と価値とを力説している。この美的感情を陶冶するのが全生命である。しかし、音楽教授に関しては、根拠を提供していないし、具体的な教授問題に関しても及言していないのは不思議である。

②音楽に関する学説としては、シュトラウスの一例をあげて批評し、古代ギリシアのプラトンの音楽陶冶の目的を数行ばかりと、芸術教育の根本問題において「音楽」に関して2頁を割いて一般論を説いてあるだけである。本書が普通教育における芸術的陶冶に資する大著述書であるにもかかわらず、音楽ならびに唱歌の教授について論述していないのは残念である。

③他教科との価値関係を説き、描画作動における陶冶面を拡大しているが、実現するのは難しいのではないか。

質問部分の内容は、以下、①～④にまとめた。

①171頁に「有力なる芸術的天才が徳よりも寧ろ不徳を好んで抽出する所以」について172頁にわた

って説いてあるが、さらに明解に教示せよ。

◇ 420頁に「然し此の成熟は、適当にして且つ正当なる時期に於て教育的指導をなせば、なほ一二ケ年、早く成熟せしめ得ることが、可能であらうと思はれる」と説いてある。この「適当にして且つ正当なる時期」は、個人的に規定されるものであると考えられる。「適切な時期」における児童に具現される要件とはどのようなものか。

◇ 421頁に「表象による図画即、記憶画は、図画的活動を示す所には、如何なる場合にも発達し、凡ての図画練習への出発点に、置かなければならぬ」と説いている。そして、620頁に「表象の稟賦が、画の天才を示すもので、記憶の稟賦は、画の天才でない」と述べて、シュタイナーの研究の結果を要約している。しかし、「表象の稟賦が画の天才を示し、記憶の稟賦は、画の天才でない」という意味の内容がしっかり受けとれない。

◇ 「女兒は『リズム』的の、装飾平面画に於て、男児に優れて居る」という「リズム」的装飾平面画とは、どのようなものなのか。

北村の内容に対する賞賛、同意、弱点の指摘、質問は以上である。さらに特筆すべき内容として、本書を読んで特に感ぜられる点は、著者が図画と云ふ教科に対して、要求される方面が所謂芸術論者や、自由画主唱者や、美的教育家の、求めやうとするところと非常に別趣なもので、且つ非常に多方面であると云ふことでありますが、尚言ひ換へれば、著者は図画教授をして技術的陶冶に、資せんとする可成り、大きな意企と描画作動から受ける、精神的陶冶、即ち調育と云ふ方面に図画科の使命を持たせて、居られる様に、思はれるのであります。

再び是れを云い換へれば、著者は、図画教授の価値や、仕事や、目的を、今までのやうに、表描される結果の上にはばかり求むるのでは無しに——尤も今までとても全然結果のみに、図画科の価値を、置いたのではないが著者の説いて居られる所は、程度の問題などでは無く、本質的に別趣なものを要求して、居られるのです。

つまり結果と共に過程そのものの中に、陶冶の實際を説き又価値を汲もうとして居られる様に思はれます。（棒線は本論執筆）¹⁶⁾

があげられる。特に棒線部中の「別趣なもの」は、関衛の芸術教育論を位置づけする上で重要な手がかりとなり得る。その理由については稿を改めて論及する。

北村久雄は、長野県筑摩郡中川小学校の音楽の教師をしていた。北村の書いた「児童の芸術白空想」は、雑誌『芸術自由教育』（日本児童自由画協会、大正10年1月1日）創刊号にとりあげられ、その後も何回か発表する機会を与えられた。それが機縁で世に知られ、『音楽教育の新研究』で世に問い、神戸須磨小学校に転勤して音楽教育者として名を成した¹⁷⁾。北村は、関衛も寄稿している『芸術教育の新研究』（文化書房、大正11年）と『芸術教育の最新研究』（文化書房、大正13年）に寄稿しており、『芸術教育の新研究』では「唱歌科に於ける芸術的陶冶」を、『芸術教育の最新研究』では「音楽教育の芸術的要義」を寄稿している。このようなパターンは、関衛と同様のものである。音楽を専門職とする北村にとって、音楽に関して詳細な論及がなされていないことを不服とするのは当然であり、112は、芸術教育の媒体として図画教育と同等の量をもって音楽教育を論じていないことを批判しているのである。

関衛は北村のこのような批評および質問にどのような反応を示し得たのであろうか。北村の論評が発表された大正11年（1922）5月以降に、関衛がおおやけに北村の質問に答えたようすはない。

直接、北村に返答したのかもしれない。しかしその点はいまだ詳細でない。いずれにせよ、『普通教育に於ける芸術的陶冶』が世間に影響を与えたのは明確である。事実、教育学者・小林澄兄は、『最近教育思潮批判』（明治図書、大正13年）の243-244頁において、「我国の芸術教育主張」の代表的な書物としてこの『普通教育に於ける芸術的陶冶』をとりあげている。読者の多くからは、その内容は、北村が感じたように「著者が図画と云ふ教科に対して、要求される方面が所謂芸術論者や、自由画主唱者や、美的教育家の、求めやうとするところと非常に別趣なもので、且つ非常に多方面」であり、「本質的に別趣なもの」を要求していると感じたと受けとめられたと考えられる。なぜ、北村は「別趣なもの」と感じたのであろうか。この問題については、繰り返し述べるが、関衛の芸術教育論を位置づけする上で重要な手がかりとなるので、稿を改めて論及する。

小学校教員時代における芸術教育書と生活との関連

『天候と人生』ならびに『水の自然と人生』を執筆したときの関衛像については、前出の「大正初期の長崎における美術教育運動と関衛による科学普及書の執筆」で述べた。また、『普通教育に於ける芸術的陶冶』については、本論ですでに述べたので、ここでは、小学校教員時代に執筆したその他の芸術教育論についての著書とそれに関連する事柄を述べる。

『芸術教育の新研究』は、成城小学校の創立者・沢柳政太郎（帝国教育会）が編纂して大正11年（1922）文化書房から発行された。石幡五郎、阿部重孝、吉田熊次、林博太郎、入沢宗寿、原田実、佐竹富夫、小原国芳、関衛、有島武郎、西宮藤朝、宮島新三郎、青木健作、三浦関造、松村武雄、秋田雨雀・本居長世、岡部弥太郎、龍山義亮、三浦喜雄、小林佐源治、田中末広、奥野庄太郎、志垣寛、北村久雄、上村福幸、斉田喬、藤山快隆、大伴茂、葛原幽、倉橋惣三、秋葉隆、春山作樹の執筆者が連なる中に関衛の名があり、「教育に於ける芸術的陶冶」という題で執筆している。内容は、関の図画教育への理想論を抽象的な形でうたいあげたものである。

編纂者・沢柳政太郎は、しばしば長崎を訪れている。文部次官であった沢柳は、明治40年（1907）12月17日に長崎を訪れた。12月18日、医学専門学校、県立中学校、水産共進会跡および三菱造船所を巡視し、19日に県立師範学校、高等女学校を巡視の上、岡山へ向かったのが最初である。このとき関は師範学校生であった。

大正4年（1915）4月24日に、長崎高等商業学校創立十周年記念祝典参列のため長崎に来て、県教育会の要請で、県立師範学校講堂で2時間余にわたる講演をした。このときは、関は島原半島の小学校の教員であった。

大正12年（1923）4月21日には、壱岐郡教育会の招聘に応じて、午後4時より県立長崎中学校において講演している。このときも関は、島原半島の小学校の教員であった。この年の沢柳の長崎訪問についての詳細は、当時の新聞で知ることができる。

大正12年（1923）4月20日の東洋日の出新聞第6528号によれば、「沢柳博士講演二十一日 別項の通り沢柳博士来崎の筈につき本県教育課主催にて同日午後四時より県立長崎中学校講堂に於て同博士の教育に関する講演を請ひ小中学校教員其他有志の来聴を歓迎する由」とあり、同年同月21日の東洋日の出新聞第6529号には、「沢柳博士二十二日着 二十一日の午後三時四十三分長崎着の予

定なりし 沢柳博士は天候の為壹岐出發一日遅れたるを以て長崎着も二十二日午後三時四十三分となり長崎中学校に於ける講演会も二十二日午後四時となりたる由」とある。同年同月24日の第6532号には「国民教育(一)沢柳博士講演」、同年同月25日第6533号には「国民教育(二)沢柳博士講演」、同年同月27日第6535号には「国民教育(四)沢柳博士講演」、同年同月28日第6536号には「国民教育(五)沢柳博士講演」、また、長崎新聞同年同月18日第605号には「沢柳博士を長崎に迎ふ可く」という見出しで、沢柳の長崎訪問の予定が記されている。そして、同新聞同年同月20日第6057号には「沢柳博士来崎決定と記載されている。同年同月23日第6060号には「沢柳博士講演会聴衆千数百婦人三分の一」という具合に、よく沢柳の講演会のようすを伝えている。同年同月24日第6061号には「日本教育の欠陥中等高等学校の入学試験に依つて小、中学の教育は破壊する一沢柳博士の講演上一」が掲載されている。¹⁸⁾

長崎県教育会と南高(南高来郡)教育会との連合主催の温泉夏期大学は、大正14年(1925)8月2日から同月6日まで開催された。講師の沢柳は8月2日に諫早に到着し、数日の間、講演をする。関は活水女子専門学校の教員であった。関と深いかかわりをもつ教育学者・小西重直が第二高等学校生であったころ、当時、二高の校長をしていた沢柳政太郎は小西を激励し、彼を東京帝国大学哲学科に進ませた。沢柳と小西の関係を考慮すれば、沢柳政太郎が編纂した『芸術教育の新研究』の中に関の名があっても不思議ではない。

『芸術教育の新研究』は、大正11年(1922)7月18日に発行されているわけであるから、関が大正12年(1923)4月21日の沢柳の長崎訪問の際の講演会に参加し、沢柳にまみえ、あいさつぐらいはしたと想像するに難くない。沢柳が長崎を訪れる10日前の関衛の生活を、われわれはうかがい知ることができる。なぜならば、大正12年(1923)6月1日に発行された雑誌『小学校』第35巻第5号に所収されている論文「『生活を教育にまでを読む』」には、次のように書かれているからである。「生活を教育にまで」を読む

〔一〕

先年の夏頃であったかと思う本誌上に「シルレルに帰れ」といふ小篇を書いた事を記憶して居る。其後全く衝心性脚気の為に病床に就いたまゝ、——病中に家族の喪にあひ——全快期に臨んで千々石灘地震の惨劇をした、かになめて最近漸く心身の健康を回復した位である。病中に刊行された知名の人々の著術を新開雑誌の広告で見居たので、近頃やつと其等のものを繙くことにした。志垣寛氏の「生活を教育にまで」といふのは、手頃の書物として面白く読んだもの、一つである。自分は何時にも、高遠なる理論を気持ちのいい筆致で、しかも優しく手近に描現せらるゝ氏の態度に接する毎に、直接著者自身の人格に触れて居るやうな気持がする。今日は四月の十一日、西九州は陰鬱な曇天であるが、自分の書齋から眼上を眺めると、橘湾の白波が轟々として岩壁を洗つて居る。その赤い岩壁や緑の田園の間に白砂の浜が弓状に延んで居るが、此白浜や荒波を見ると、著者の描写している久慈浜の風光を連想せずには居られない。¹⁹⁾ (中略)

〔三〕

今日は4月の十二日、西風が吹き荒れて少し寒さを覚える。断層雲の絶え間から折々日足が落ちて、橘湾を青に紺に彩つて居る。磯辺に引き上げた舟の上には、漁夫の児が四五名遊んで居る。²⁰⁾

大正11年(1922)11月15日に発表された「シルレルに帰れ」を執筆していたのは夏であり、「其後全く衝心性脚気の為に病床に就いたまゝ」という事実は、前掲の小柳美保の手紙《八》で確認できる。病中に家族の喪にあひ」というのも、やはり、小柳美保の手紙《八》によって、妻・チトシの死であることが確認できる。チトシは、同年10月8日に死亡している。「全快期に臨んで千々石灘地震の惨劇をしたたかになめて」というのは、大正12年(1923)4月18日の長崎新聞第6055号の「南高小浜に町制施行 村会満場一致で可決」の記事にも「過半の地震で一時は浴客が激減した計りではなく」と記されていることから、大正11年(1922)10月以降に大きな地震が小浜をおそったことを示す。実際、同年12月8日に島原半島に大地震が起り、震源地は千々石灘で、死者26名、重軽傷者129名、全半壊家屋2000戸となった。同時に長崎市にも地震はおよんだ。このことから、関は大正11年(1922)の夏から12月の冬まで、脚気にかかっていたことになる。脚気にかかった身で、チフスにかかった妻・チトシを見舞う関の姿は容易に想像できる。

「四月十一日」というのは大正12年(1922)4月11日のことであり、沢柳が来崎する10日前である。同時に「四月十二日」というのは、同年同月12日のことであり、沢柳来崎9日前である。現・小浜―富津の海岸線は防波堤が築かれ、白砂の浜を見いだすことは容易ではない。また、当時は小浜・富津港は、磯部に船を引き上げていたらしい。

以上のように、小学校教員時代における関衛の生活は、漁村に在住しながら、あるときは病気にかかり、あるときは、家族の死にあい、天災にも見舞われつつ生活している一教員の生活であり、そこでひとり病気になったがゆえに、日常のあるいは学校における業務上雑事から解放されて、深く本を読みふける姿がある。つまりそこには、ひとときの間に、多くの本をむさぼり読む姿がある。またあるときには、東京から来訪する教育学者たちの講演会にも参加したであろう。

序章において述べた「大正時代の教育の普及化」という場合には、中央の教育感化が地方に波及していった効果ばかりをさすのではなく、反対に、地方で生活しながら自らの思想形成をおこない、中央論壇へ参加し、活躍した場合も考慮すべきであろう。関衛の小学校教員時代の姿には、まさにこの典型を見いだすことができるのである。

関や前述の北村のような地方教員による論壇主張の思想形成は、都会の雑音の中からではなく、静かな自然に近い環境しかも生活の中からなされたものである。それがゆえに、テーマが壮大であり、ある意味で「別趣」ものを生み出すことができたともいえるのではなからうか。小学校教員時代の関衛は、少し病気がちで、気弱で、家族をひたすら愛し、一教員として学校組織に属しつつも、子どもに対する幅広いゆとりを自らの内面に所持していたように推察できる。そして、情熱的に子供を追求する姿をそこからうかがうことができる。このようなイメージは、「活水奉職時代」ならびに「東京時代」の関とはまた異なるイメージの関衛像である。

『芸術教育の理論及実際』(東京同文館、大正12年)は、『大正書籍総目録 大正十二年版・総索引』(ゆまに書房、1985年)71頁の「定価」の欄に「印刷中」とある。本論筆者は、大正期以前に設立した全国の図書館を調査した²²⁾。しかし、原書を見つけたすに至っていない。

大正12年(1923)には、9月1日に「関東大震災」がおこっている。『芸術教育大観』の序文に「この小著は余が最近数箇年間に於て種々の教育雑誌や或いは講演などで発表した芸術教育に関する論説中、関東大震災の厄を免れたもののみを集めて、以て一卷の論集したものである」と記されている。また、『児童図画心理学』の序では、「著者は十数年以前から、我が国に於ける図画教育

学の建設上、日本児童の図画能力に関する研究の不足を感じて居たので各市府県から数万の児童画を募集して、数年間に涉つて研究を重ね、心血を注いで『日本児童の絵画』を完成したが、この研究物は関東大震災の際に、或る書肆の金庫の中で、原稿のまままで烏有に帰したのである」と記されている。これらのことから、おそらく『芸術教育の理論及実際』は、関東大震災の際に同文館が火災にあい、出版不可能になったのではないかと考えられる。

注

- 1) 『茨城大学教育学部紀要』第46号, 1997, 31-50頁。
- 2) 関衛研究に関する論文については、「活水女子専門学校中等教員時代の関衛（せき・まもる, 1889-1939）像」（『茨城大学教育実践研究』第16号, 茨城大学教育学部附属教育実践研究指導センター, 1997）の注2において列記している。
- 3) 「博士論文概要：関衛研究－関衛（せき・まもる, 1889-1939）と大正期芸術教育思想の展開－」『芸術教育學』第7号（筑波大学芸術教育学研究室, 1995）16頁。
- 4) 関彦治は、安政2年（1855）7月18日に、長崎県南高来郡北有馬村の飛永喜代七・マツ夫婦の長男として生まれる。関寛平の養嗣子となり、寛平の死亡により明治38年（1905）8月7日家督相続して戸主となる。大正7年（1918）12月19日午前11時30分、関家で死亡する。戸籍には「同居者四男関寛之ノ家督相続届出アリタルニ因リ本戸籍□□ス」とある。

関寛平は、天保4年（1833）5月21日に、関興左衛門の長男として生まれる。南高来郡南串山村、馬場典礼の二女・テツ（天保11年12月29日生）と結婚。明治38年（1905）8月7日午前11時30分に死亡する。
- 5) タダシは、安政4年（1857）11月11日、関寛平・テツ夫婦の長女として生まれる。
- 6) 長崎師範学校は、初等教育教員の養成機関で、現長崎大学教育学部の前身である。そのはじまりは、明治7年（1874）2月、長崎市勝山町向明小学校（現・勝山小学校）に設置された小学校教則講習所（教員仮師範所）である。その後、名称を改め、長崎公立師範学校となり、明治10年（1877）には崎陽師範学校と改称した。当時、佐賀県は本県と合併していたので佐賀師範学校と県内を二分し、教育養成事務を分担した。同年11月、新町の旧小倉藩邸の新築校舎に移転、翌年6月佐賀師範が廃止され、長崎県師範学校と改称し教員養成の事務は専ら本校だけとなった。

明治21年（1884）6月、西浜町に長崎県女子師範学校を創立した。翌年4月には長崎県師範学校に合併し、同年6月、長崎県尋常師範学校と改称し、明治26年（1889）5月桜馬場町の新公舎に移転した。さらに明治35年（1898）4月には、長崎県師範学校と改め、教員養成の基礎を固めた。

明治45年（1907）一カ年制の二部（中卒）を設け、翌年4月、女子部を立山町の旧長崎中学校跡に移し、長崎県女子師範学校として再び独立させた。大正14年（1925）には、本科一部を4年制から5年制に延長し、一カ年制の専攻科を設けた。第二部は昭和6年（1931）に2年制に延長され、昭和14年（1939）には、男子師範二部に大陸科が設置された。これに先立ち男子

師範は、一時、大村市久原に移り、その跡に女子師範が移ったが、昭和9年(1934)には男師と女師が入れ替わり、男子師範は再び桜馬場に復帰し、昭和12年(1937)、西浦上の新校舎に移転した。

昭和18年(1943)の師範学校令により官立専門学校に昇格し、両校を合併する。予科2年、本科3年となり男子部と女子部が置かれた。昭和20年(1945)8月の原爆で男子部は壊滅して、一時、大村市の旧連隊跡に移転した。昭和24年(1949)5月「国立学校設置法」の実施で、長崎大学に包括され、学芸学部現教育学部)として新発足する。昭和26年(1951)3月創立以来、76年間続いた長崎師範の幕を閉じた。(宮田藤臣「長崎師範学校」『長崎大百科事典』長崎新聞、1984年)。

- 7) 向野康江「関衛による『芸術教育の予件としての児童研究』の意義について—『普通教育に於ける藝術的陶冶』の『中編』を中心として—」『美術教育学』第10号(美術科教育学会、1989年)、35頁。
- 8) 秀穂は大正3年(1914)11月9日に誕生、ミホは大正5年(1916)12月26日に誕生、徹は大正8年(1919)1月15日に誕生し、大正10年(1921)1月24日に死亡する。大正10年(1921)2月9日誕生の明子は、昭和4年(1929)1月3日、吉田基一・ウラ夫婦の養女になる。
- 9) 『造形美術教育研究』第5号、上越教育大学芸術系美術教科教育研究室、1991年、11-20頁。
- 10) 『教育実験界』は創刊号に「本誌の特色」を記して、「理論は明日の事実なり、事実は昨日理論なり、理論と実際としかく相俟て進歩始めて成る、今の教育界は果たして如何、理論家は実際に迂濶なるなきや、實際家は理論に疎遠なるなきか、若しこの如くならば、何れの時か、道の進歩を見るを得んや、而して、両者の間に立ちて、能くその気脈を通じ融和を図るの機関たるべき教育雑誌は即ち如何、(中略)国民教育に従事する實際家に、最大の裨益を与ふべき材料の乏しきは、吾人の竊に憂ふるところなり。(中略)本誌はこれら有益なる実験談の集成を期し、実験界を代表して世にたたんとす。」とした。この発刊の意図において述べられている、学と術の調和的統一を志向する考え方は、この時期、この種の雑誌が共通してもっていた刊行の意図の特徴でもあった。執筆陣は、高等師範学校付属小学校、地方の師範学校付属小学校の訓導たちが中心となっている。社説は「会説」として第7巻第3号から設定され、またこれは第9巻第3号から「主張」となり、渡辺英一(隈川)が「主張」を担当したのは第36巻第3号までである。第36巻第4号から石川天崖、第37巻第6号から稲毛詛風が担当する。稲毛が主筆となってから発刊の目的から外れ出し、理論研究の方に重点がかかってくる傾向を示す。そして、『教育実験界』は『創造』になり、創造教育を中心とした教育の理論的研究へと変化し、稲毛色の強いものとなっている。このように教授法中心であった雑誌が理論研究へと変化していく。しかもその時期が大正中期である。(『教育関係雑誌目次集成』第1期・教育一般編・第20巻、日本図書センター、1989年、106頁)
- 11) 本文中該当雑誌、21-22頁。
- 12) 『教育画報』は、第1巻第1号(大正4年9月1日)から第20巻第6号(大正14年12月1日)まで同文館より刊行された。本誌は、「教材研究の資料」または「一般家庭の読物」として創刊された月刊雑誌で、各教科の教材について各専門家が解説を加えているほかに、精緻な写真と鮮麗な挿絵が各頁にそえられているのが大きな特色である。たとえば「偉人傑士の肖像、内

地外国の名称，古今の風俗，東西の美術花卉禽獸，医薬工芸」など見て楽しめるものが多い。刊行は，創案者の岸田蒔夫（牧堂）と発行所の同文館が一致協力しておこない，教育界はもとより一般家庭の歓迎を受けて好評であったようである。（『教育関係雑誌目次集成』第1期・教育一般編・第20巻，前掲1155頁）

- 13) 雑誌『小学校』は，第1巻第1号（明治39年4月15日）から第51巻第11号（昭和8年2月1日）まで，同文館より刊行された。『教育関係雑誌目次集成』第2期・学校教育編・第20巻（前掲）の74-75頁には、「本誌は『着実正確にして真に系統ある研究の結果を発表して教育者および当局者を警醒し指導し且つ共に置く研究を試みん』ことを標榜し，而して『教育学心理学倫理学等の通常講話を載す』ことを以て同文館より創刊された。同誌は，数多くの臨時増刊号を刊行しているが，現在，確認できている冊数は二九冊に及ぶ。（中略）雑誌『小学校』は編輯主幹の変化，誌面の変化などはあるものの，創刊以来廃刊にいたるまで初等教育研究雑誌として実際的な研究の発表の場を守ると同時に研究と実際をつなぐ役割を果たしてきた雑誌であると見ることができるだろう。」と説明されている。
- 14) 岸田牧堂は『教育画報』の草案者でもある。岸田は，明治7年（1874）1月29日，島根県津和野に生まれ，島根県師範学校卒業後，小学校の訓導ならびに校長をつとめた。しかし，操觚界に転じて同文館に入り，雑誌『教育画報』の編集にたずわった人物である。ところが，発行所・同文館が大正15年（1926）2月11日から，突然，誌名を『文化画報』とかえたため，岸田は同文館を辞め，同年11月25日，『教育画報』復興第1号を世に送りだし，「教材研究の資料」と「一般家庭の読物」という二つの使命を貫こうとした。しかし，現在のところ復興された1冊しか確認できていない（『教育関係雑誌目次集成』第1期・教育一般編・第20巻，前掲，115頁）。雑誌『小学校』第19巻第11号（大正4年9月1日）には，岸田牧童による「教育画報の創刊に就きて」が掲載されている。
- 15) 本文中該当雑誌，47頁。
- 16) 本文中該当雑誌，249頁。
- 17) 木戸若雄『大正時代の教育ジャーナリズム』（玉川大学出版部，1985），48頁。
- 18) 「一沢柳博士の講演 下」については未確認。
- 19) 本文中該当雑誌，46-47頁。
- 20) 本文中該当雑誌，49頁。
- 21) 「関衛（1889-1939）の研究業績一覧」『茨城大学教育学部紀要』第46号（茨城大学教育部，1997，31-50頁）に所収。